

「きらきらしてて、うっさい。」

—初稿—

2025/5/28

雨森 れに

〈人物表〉

丹羽 涼 にわ りょう

（16）高校2年生。見た目が派手。

北島 藍里 きたじま あいり

（16）涼のクラスメイト。保健室登校している。

三竹 燈子

（32）養護教諭

1. 海沿いの道路（朝）

夏の朝。日差しが強く、海面が輝いている。
制服姿の丹羽涼（16）。自転車をこいでいる。
涼の金髪も光を受けて輝いている。
海を見て、砂浜にいる制服姿の女子生徒を見つける。
北島藍里（16）である。

2. 砂浜（朝）

波打ち際から離れた場所に大きな流木がある。
藍里はその上に座っている。
アトピーを隠すようにカーディガンを着ていて、足元は厚手のタイツ。
海を見ているわけではなく、手元の文庫本に集中している。

3. 海沿いの道路（朝）

涼は藍里を眺める。
そのせいで自転車のバランスを崩す。
が、何事もなかったかのように自転車をこぐ。

4. 学校・昇降口（朝）

登校時間で賑やかな雰囲気。
涼は下駄箱から上履きを取り出し、雑に落とす。
踵を踏んだ状態で履き、校内へ。
通りがかった三竹燈子（32）。
涼の踵に気づき、

三竹 「丹羽くん、上履き」

涼 「（めんどくさそうに）俺はこれでいいの」

三竹 「だめだめ。学校はTPOを学ぶ場所だからね？ それに成長期にそんな歩き方したら将来——」

涼が、話を遮るように、カバンを床に打ち付ける。

涼 「うっさい」

周囲の生徒が涼を見ている。

三竹は動揺せず毅然とした態度。

三竹 「暴力で解決しようとするの、よくないよ」

涼 「しらねー」

涼がその場を去る。

その様子を遠巻きに見ている藍里。内肘を擦る。

5. 学校・廊下（昼）

2年生の教室が並んでいる。

ガラスの割れる音。

6. 学校・教室（昼）

ざわついた室内。窓ガラスが一枚割れている。

生徒らが窓から距離を取っている。

涼はひとり窓際に立っている。

右手から流血しているが、冷静である。

涼 「（右手を見て）保健室、行ってくる」

誰も返事をしない。

歩き出す涼と、避ける生徒たち。

教室の端には野球のボールが転がっている。

7.

保健室（昼）

一般的な保健室。中央に生徒用のテーブルがある。

涼が入ってくる。血は止まっているが、制服や左手

に血がついている。

テーブルにいた藍里が、驚きの表情を浮かべる。

涼 「三竹せんせーは？」

藍里 「職員室。すぐ戻ってくると思うけど……大丈夫？」

涼 「ちょっと切っただけ」

藍里が濡らしたペーパーを持ってくる。

藍里 「拭いたら。あ、傷口は触っちゃだめだよ」

涼 「（右手の指先以外を拭きながら）慣れてんな」

藍里 「毎日ここにいるからね」

藍里がテーブルを指さす。

そこには教科書とノートが広げている。

涼 「お前さ、転校してきてから一度も教室きてなくね」

藍里 「同じクラスって覚えてたんだ」

三竹 「ただいま……って血だらけ！」

三竹が慌てて、涼に近づく。

涼 「右の指。なんか、どの指も痛い気がする」

三竹 「見せて」

三竹は涼の右手を取り、傷を確認する。

三竹 「これは……一応、病院かな。何で切ったの？」

涼 「ガラス」

三竹 「（思い出したように）ああ、窓割れたって……そういうこと」

藍里が眉をひそめる。

涼は答えない。

三竹 「とにかく、病院だね。北島さん、ここ閉めちゃうけど、どうする？」

藍里 「じゃ、帰ろっかな」

三竹 「OK。担任に言っとく。あと、寄り道しないでよ」

藍里 「はい」

三竹、涼に応急処置をはじめめる。

藍里は勉強道具を鞆にしまう。

涼は三竹の質問に相槌を打ちながら、藍里を見る。

藍里が涼のまっすぐな視線に気づく。

藍里 「おだいじに」

涼 「ん、またな」

藍里が出ていく。

三竹、微笑んで、

三竹 「北島さん、いい子でしょ」

涼 「しらねー。さっき初めて話したし」

三竹 「今度おしゃべりしにきたら」

涼 「なに喋ればいいんだよ。つか、ホントうっさい」

三竹が、ふふっと笑う。

三竹 「よし、おわり。じゃあ行こっか」

涼は、三竹に連れられて保健室を出ていく。

一瞬振り向き、藍里の座っていた場所を見る。

8. 海沿いの道路（夕）

涼、右手に包帯を巻いた状態で自転車をこいでいる。
朝と同じ場所にさしかかり、藍里を見つける。
ペダルを踏む足が速くなる。

9. 砂浜（夕）

藍里は、朝と同じ流木の上で読書している。

涼 「寄り道すんなって言われてなかった？」

藍里が目を丸くする。

涼 「いつも驚くのな」

藍里 「だって、なんでここ……」

藍里が涼の包帯に気づく。

涼は、自慢するように右手を見せる。

涼 「縫った」

藍里 「窓、割ったの？」

涼 「しらねー」

涼が流木を背にして砂浜に座る。

右手を空にかぎす。グーパーしようとするが、うまくできない。

藍里 「後遺症とか、残るの？」

涼 「将来のことなんか知るか」

藍里 「なんかズルい。私は将来のことばっか考えてるのに」

涼 「たとえば？」

藍里 「海が肌を治してくれたら、何しようって」

藍里は痒そうに内肘を擦る。

涼 「治んの」

藍里 「ママが、潮風がいいんだって」

涼 「海が好きなんだと思ってた」

会話が途切れる。

夕日が海を照らし、黄金にきらめいている。
ゆっくり落ちていく太陽を眺めるふたり。

10. 海沿いの道路（夜）

涼が自転車を押している。

藍里は並んで歩く。

藍里 「なんで話しかけてくれたの？」

涼 「しらねー」

藍里が立ち止まる。

涼が不思議そうに藍里を見る。

藍里 「言いたくないこと、全部『しらねー』だね」

涼は口ごもる。

藍里 「ま、別にいいけど」

藍里が歩き始める。

涼はまだ立ち止まっている。

涼 「俺、きらきらしたもんが好きなんだよ」

藍里 「（振り向く）え？」

涼 「朝とか、海とか。んで、そこに北島がいる」

藍里 「あそこにならから気にかけてたってこと？」

涼 「じゃなくて。なんていうんだ、これ」

涼が苛立たし気に頭を掻く。

涼 「自分もってるの、きらきらしてる……気がする」

藍里 「私、隠してばっかだけど（内肘を擦る）。保健室に逃げてるし」

涼 「自分がなきゃできないじゃん」

藍里は黙って涼の話を聞いている。

涼 「あと窓か。あれは野球部のボールで割れた。んで、なんか割れた瞬間がきれいでき。触ったら切った」

藍里 「え、バカ」

涼 「うっさい」

藍里 「うそうそ。私も今日、きらきらしたものが好きになったから。わかるよ」

藍里が涼の髪の毛を触る。

涼、照れながらも顔をしかめる。

藍里の笑い声が夜の海に響く。